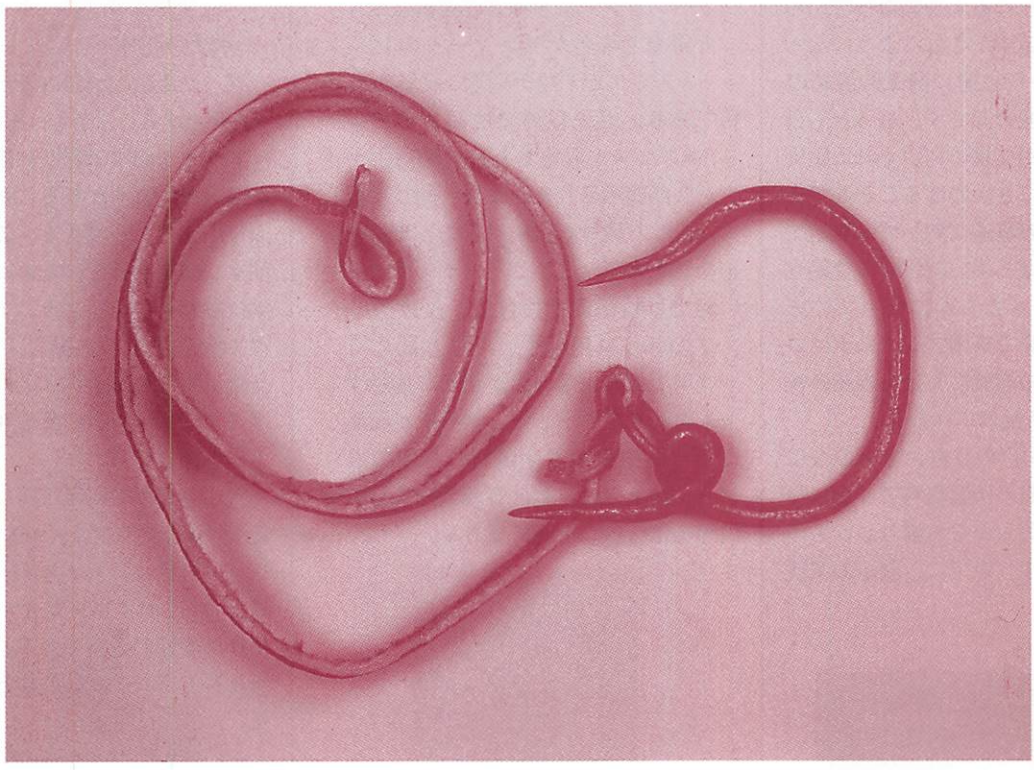
ISSN 0917-4729

北方民族博物館だより No.51

CONTENTS

2　特別展　先住民社会と水産資源ーサケ・海獣・ナマコー
4　特別展関連講演会　先住民社会と水産資源ーサケ・海獣・ナマコー
5　事業報告　北海道博物館紀行①「木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド」
6　INFORMATION



H7.47 川サケ漁用鉄製鉤先(10.9cm)
コリヤーク　ロシア／カムチャツカ州／カラガ　1993年収集

鉤(かぎ)はヤスと同様に魚体に突き刺して捕獲する道具であるが、ヤスに比べ使用方法や構造が複雑である。ヤスの場合、前方に押し出す、あるいは投げつけて獲物を突き刺す漁具である。一方、鉤状の漁具では釣り針型の鉤を柄(え)（あるいは中柄）に固定して手前に引いて魚体を獲得する引き鉤型式のもの、および固定した鉤を獲物に突き刺し、鉤を柄から離脱させることによって捕獲する離脱型式のものがある。

今号の表紙、サケ漁用鉄製鉤先は、離脱式の鉤型漁具である。離脱の方法としては鉤が回転しながら離脱するものと、鉤が直線的に後方にスライドしながら離脱するものがあり、表紙は前者の運動を行う。この鉤は基部前端の紐穴(ひも)と柄の先を紐で結束し、突きの動作から手前に引く動作によって、鉤は基部前端を支点に回転する。鉤の回転を利用した構造を持つ鉤銛は、鉤の装着方向や、中柄の有無、紐穴の有無などにより若干形態が異なるが、コリヤークの他、イテリメン、エベン、北海道アイヌ、千島アイヌ、サハリンアイヌなどにも見られる漁具である。

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

第18回特別展

先住民社会と水産資源 - サケ・海獣・ナマコ -

7/19（土）～9/28（日）　当館特別展示室

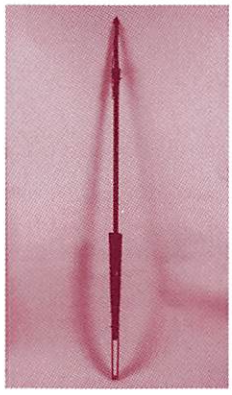
本年度の特別展は、北方の人びとの根源的な営みの一つである水産資源の利用と流通をテーマに企画しました。北方の先住民社会で利用された主要な水産資源はサケと海獣類ですが、それらの捕獲や利用を取り上げています。こうした北方の水産資源がグローバルな経済とつながりをもったのは、ラッコやオットセイが毛皮交易に用いられるようになってからです。サケは缶詰加工されるようになった19世紀半ばから急速に商業的漁業の対象となった水産資源です。もっとも日本においてサケが交易に利用された歴史は江戸時代以前にさかのぼることができます。水産資源の流通に関しては東南アジアでおどろくほど古い時代から交易されていたことがあきらかになっています。そうした意味で東南アジアのナマコに代表される南の海域における水産資源の利用についても触れています。

展示資料約160点のうち、３分の２は国立民族学博物館の所蔵資料で、他に当館の収蔵資料と個人からお借りしたものが含まれています。以下に、展示の概要を紹介します。

海獣狩猟

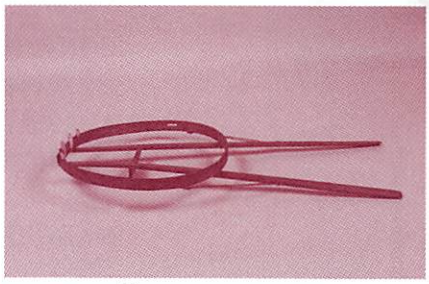
―銛と銛先、船―

海獣狩猟は北方地域沿岸の先住民にとって重要な生業であった。とくに食料としてカロリーが高く、ビタミン類やミネラルを含む皮下脂肪は重要であった。海獣猟には基本的に銛が使われた。最初のコーナーでは、アイヌ、カナダ、アラスカ、グリーンランドのイヌイトの銛先と銛を数多く展示した。とくに国立民族学博物館の資料にはグリーンランドの銛や銛先が多く含まれているが、これらはグリーンランドなど極北の探検とイヌイット研究で著名なデンマークのビルケット=スミスが1920年代に収集した資料である。銛先以外では同じくビルケット=スミスが収集した比較的古いナイフが３点展示された。また、同じく極北を探検した植村直己氏が収集した銛や銛先なども含まれている。アラスカの小型の銛では投槍器で投げる“投げ矢”タイプのラッコ用銛や、やはり同じくラッコ用である先端の鏃が銛状に離脱する矢もあわせて展示した。植村氏が収集した銛は柄や中柄が金属製のものであり、グリーンランドにおける海獣狩猟具の現代的変化を示した資料である。


銛／グリーンランド・イヌイト（当館所蔵）

極北の猟舟としてグリーンランドのカヤックを一艘展示した。また、カヤックに積載する銛綱とそれを載せるラックや銛綱につながれるアザラシ皮製の浮袋（フロート）に息を吹き込む空気袋吹込み口など、カヤックに積載する海獣狩猟の周辺道具も展示した。

そのほか、極北地域の皮舟としてアラスカ、グリーンランドのカヤック模型、同じくウミアックの模型を展示した。


カヤック積載用銛綱置き／アラスカ・イヌイト（当館所蔵）

―海獣の利用―

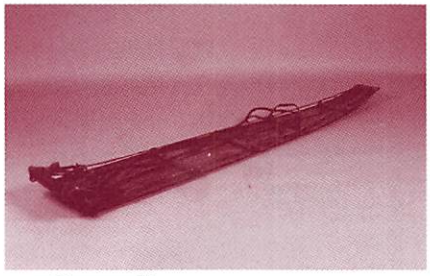
獲った海獣の利用のなかでは皮下脂肪を食料とすることがもっとも代表的である。

アザラシの皮下脂肪は細かく刻んで暖かな室内に置くか煮ることで液状の油を取り出すことができる。こうした液状の油は、酸化させないために、なるべく空気に触れさせないよう、アザラシなどの胃や膀胱などの内臓に入れて保存した。当展示では北海道アイヌの油容器２点とニブフのアザラシの胃を利用した油容器１点を紹介した。

衣類としての利用に関して展示した主な資料は、アラスカ・イヌイトのブーツ、グリーンランド・イヌイトのアザラシの腸でつくられたパーカ（アノラック）、アザラシ皮性の手袋である。クジラ類の利用としてクジラ髭製の櫂と容器を紹介した。

そのほか、セイウチの牙製のクリベッジボード、タバコ用パイプ、タバコ挽き臼など毛皮交易と関係する資料も展示した。

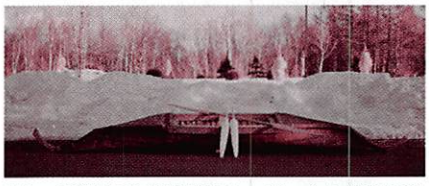
また、海獣の捕獲・利用に関する写真パネル20枚ほどで極北地域のアザラシやシロイルカ、グリーンランドの市場など海獣狩猟文化の現代を紹介した。


クジラ髭製手引き櫂／アラスカ・イヌイト（当館所蔵）

漁　撈

－獲る－

北方の漁撈(ろう)についてはさまざまな釣道具、とくに釣針を中心に紹介した。北アメリカ北西沿岸の大型の釣針やアムール川流域の氷下漁用の釣具、あるいはサケを突き捕る鉤(かぎ)銛類、カムチャツカの簗(やな)模型が主な資料である。関連する船とその周辺資料として北アメリカ北西沿岸の丸木舟、アイヌの板綴り船模型、アムール川流域の白樺樹皮製カヌー、櫂(かい)、淦汲(あか)みなどを展示した。



アムール川流域の白樺樹皮製カヌー／ナーナイ（当館所蔵）

南方の漁撈のコーナーでは東南アジアの河川等で使われたさまざまな大きさ、形状の筌(せん)や投網、引網、ヤスや銛を展示した。

－利用－

北方の漁撈に関する利用ではサケなどの魚皮の利用についてブーツや袋類、衣服で紹介することができた。これらにはサハリン北部にて鳥居龍蔵が収集した魚皮製袋２点も含まれている。

南方における利用に関する資料は干しナマコ－日本産のマナマコ、東南アジア産ナマコ４種－を展示した。

北方の漁撈に関する写真パネルでは、サケ漁やサケの利用が中心となったが、南方に関してはナマコの利用だけではなく、フカヒレや貝など“特殊海産物”の加工やそれらを販売する乾物店などを紹介した。

映像展示

展示した映像はカムチャツカで最近撮影された先住民による漁撈を紹介したものである。

ひとつは、小樽商科大学の大島稔教授が2002年8月と12月にカムチャツカ半島北東部のイリプイリ村で撮影した映像を編集して、タイトル「漁撈の風景－カムチャツカ・イリプイリ村の人びと－」とした約５分間の作品である。コリヤークの人たちのフィッシングキャンプの生活と厳冬期の氷下漁を紹介している。もうひとつは同じくカムチャツカの西海岸、パラナ村やチギリ村などで1998年、2000年に当館の渡部学芸課長が撮影した映像を編集した「カムチャツカのサケの人びと－イテリメンとコリヤーク－」である。約４分の映像ではサケを獲って裁割、乾燥する人たちの営みが紹介されている。

最後に、展示資料の協力をいただきました国立民族学博物館に感謝申し上げます。また、大島稔氏（小樽商科大学）、岸上伸啓氏（国立民族学博物館）、赤嶺淳氏（名古屋市立大学）には写真、映像、あるいは展示資料の提供等でご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

（学芸課長　渡部　裕）

関連講演会　先住民社会と水産資源 - サケ・海獣・ナマコ -

7/26(土)13:30-16:30 当館講堂

第18回特別展の関連事業として講演会「先住民社会と水産資源－サケ・海獣・ナマコ－」を３名の講師により開催しました。当講演会では北方における海獣狩猟やサケ漁を中心に、先住民社会における水産資源の捕獲や利用について、また、それらの歴史的な変遷について北東アジアや北アメリカの事例に基づいて紹介されました。さらに、北方と対照的な地域として干しナマコやフカヒレなどの交易品を目的とする漁業が行なわれてきた東南アジアの事例についても紹介されました。

各講演の概要は以下のとおりです。

講演１「北東アジアの水産資源の利用と流通」

講師　渡部　裕（当館学芸課長）

北太平洋沿岸における生物資源利用の特徴はサケと海獣類に集約されることである。ほとんど全ての民族集団でサケを乾燥加工するとともに海獣類の狩猟が行なわれてきた。北方諸民族では河口を含む河川内でサケ漁が行なわれ、それらは川中に魚止めを設置する方法、ヤスや鉤(かぎ)など突き取り具を用いる方法、各種の網を用いる方法に大別できる。

サケは新鮮な食料としても利用されるが、多くは天日や燻煙(くん)により乾燥した干し越冬食として利用されてきた。アジア側では主として天日および風による乾燥が行なわれ、北アメリカ西海岸では燻煙による乾燥が行なわれてきた。また、その皮には防水性もあり、加工技術も比較的容易なことからさまざまな素材として利用された。なかでもアムール川流域では衣類や袋物、防水シートや船の帆などに利用され、アイヌも冬靴に利用していた。

先住民社会では海獣類の肉や脂肪(しぼう)、内臓を食料として利用し、あるいは毛皮を、テント、衣類、皮船の覆いや銛(もり)綱、のき綱などの素材として利用してきた。毛皮交易の浸透とともにラッコやオットセイなどの良質の毛皮をもつ海獣類が注目されるようになり、先住民社会も毛皮交易システムに組み入れられていった。ラッコやオットセイが乱獲の影響で絶滅に瀕する状況となったことはよく知られている。またアメリカの捕鯨活動によって大型クジラ類やセイウチが乱獲されたことも資源の枯渇と交易の点で先住民社会に大きな影響を与えた。

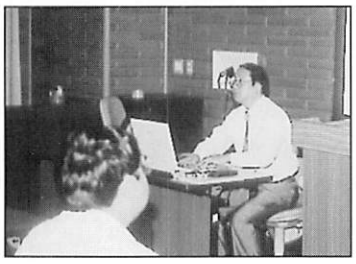
サケについては缶詰生産の発明をきっかけに商業的な漁業が北方地域に導入された。カムチャツカでは20世紀初頭頃から1945年8月のソ連対日参戦まで日本人が季節的にサケ漁業を行なっていたが、こうした日本人と先住民との接触による影響は現在でも確認することができる。

講演２「北極海・北太平洋の資源利用と流通」

講師　岸上　伸啓氏
（国立民族学博物館助教授）

北アメリカの２つの地域における水産資源の獲得と利用について紹介する。２つの地域は環境の特徴からみても、歴史からみても大きな違いがある。極北地域

はツンドラ帯におおわれ、大きな樹木が生育しない。1年は長い寒冷な冬と短い冷涼な夏しか存在しない。生物資源のなかでは大量に獲得できる漁業資源に乏しく、極北地域では漁業は生業の中心にはなりえない。海獣類やカリブーなどの狩猟が伝統的経済活動として行われてきた。



いっぽう、北アメリカ北西沿岸地域は温暖で雨が多く、イエローシダーやレッドシダーなどの針葉樹の巨木がうっそうとした森林を形成している。河川には春から秋にかけて大量のマスノスケ、ベニザケ、カラフトマス、シロザケ、ギンザケが遡上してくる。この北西沿岸に住んできた先住民はこうしたサケをはじめとする豊富な海洋資源や樹木などを利用して、首長を頂点とする比較的大きな社会を形成してきた。巨木に彫刻を施したトーテムポールや大量の貯蓄した食料や物資を贈与や破壊によって蕩尽するポトラッチなどは各地域社会の首長の威信を示すものであった。

この北西沿岸地域に毛皮交易の影響が及び、さらにヨーロッパからの植民者が増加するようになった。イギリス領となったこの地の植民者も豊富なサケを捕獲するようになり、やがてサケの商業的漁業とサケ缶詰加工がこの地域でさかんになった。それまで先住民は自由にサケを捕獲してきたが、捕獲にライセンス制が導入され、やがて先住民はこうした漁業の賃金労働者として生活するようになった。

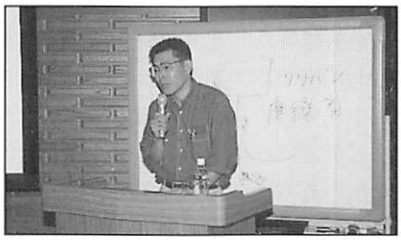
しかし、こうした先住民を排除してきた資源利用のあり方も見直しを迫られてきている。それは、近年、カナダの北西沿岸地域ではサケの漁業権をめぐるいくつかの裁判で先住民の資源に対する権利を回復する判決が示されていることである。

北西沿岸にはこうした商業的資源利用の影響が及んだが、極北地域への商業的な資源利用の影響は異なったものであった。寒冷な極北地域では農業など不可能にちかく、植民者はやって来なかった。イヌイットが捕獲していた海獣類は先住民社会で消費され、毛皮交易についても、先住民の生業を助長する銃や漁網を手に入れることができるため、マイナス要因にはならなかった。しかし、先住民が経験したことのないさまざまな病気が持ち込まれ地域社会が消滅に瀕するほどの影響があったことも事実である。新たな加工技術の開発によってアザラシ皮など毛皮の新たな需用が拡大され、イヌイットの伝統的アザラシ猟は食料を獲得する手段にも、現金を得る手段にもなった。

しかし、1980年代のヨーロッパの自然保護団体による毛皮排除運動によって毛皮の需用は激減し、極北の狩猟者に深刻な影響を与えた。また、一見クリーンな環境に住むイヌイットは農薬やPCBなどの汚染物質と無縁におもわれてきたが、低緯度地域で使われたDDTや工業地帯から排出された汚染物質が大気の循環によって極北地域に運ばれ、食物連鎖によって人間に取り込まれていることが判明している。

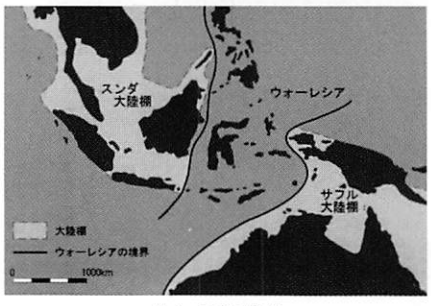
講演3「東南アジアの水産資源の利用と流通」

講師　赤嶺　淳氏
（名古屋市立大学助教授）



ウォーラセアの世界

私は先に話された2人の北方地域とは対照的な熱帯域、東南アジアの研究をしている。北と東南アジアの際立った違いは、東南アジアが非常に古くから商業的漁業活動が行なわれてきた地域であることである。東南アジアは北に中国、西にインドをひかえ、文献資料からみるかぎり6～7世紀から中国、インドに向けて積極的に交易活動を行ってきた。現在私が調査を行なっているフィリピンの南やインドネシアの島々などは辺境ということになるだろうが、かつては東南アジアの中心であったといって差し支えないであろう。その意味はこの地域がかつては水産資源をはじめとするさまざまな物資の交易の中心地であったことである。東南アジアの地図（図ウォーラセア海域）にある、大陸棚を除く海域は、この地域を調査した博物学者ウォレスにちなんで“ウォーラセア”と呼ばれているが、かつての氷期にも陸続きにならなかった海域であり、サンゴ礁が発達している。この海域では干しナマコ、フカヒレなど売るために獲って加工する海産物の生産が古くからさかんに行なわれてきた。この生産者たちは元来、干しナマコやフカヒレを利用する文化をもたなかった人たちである。こうした中国をはじめ外の世界の需用にこたえて生産される海産物を“特殊海産物”と呼んでいる。



ウォーラセア海域

移動する人びとと海産物

日本人は島国根性といって日本列島に住む人間の特徴として閉鎖性をあげているが、“ウォーラセア”の島嶼部に生活する人たちは外に向かって開かれた意識をもちつづけてきた。転々と移動することを厭わないひとたちなのである。こうした意識も交易が活発に行なわれてきた要因なのではないか。“ウォーラセア”はナツメグ、クローブをはじめとする香辛料の産地でもあり、中国やヨーロッパとも交易ネットワークでつながってきた。米以外にもバナナ、キャッサバ、サゴヤシなど多様な食料資源がある。

さて、東南アジアのナマコ生産であるが、日本で干しナマコに加工されるのはマナマコだけであるが、東南アジアでは比較的大きい22～23種のナマコが干しナマコに加工されている。ナマコ生産の特徴はなんであろうか。熱帯の漁業の代表としてマグロやエビの養殖があるが、これらは大きな資本を必要とし、だれでもが参入できるものではない。ところが、ナマコの漁業や加工はだれでも容易に参入できるビジネスなのである。

（学芸課長　渡部　裕）

北海道博物館紀行①
「木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド」
講　師　久野　幸江氏（ちゃちゃワールド学芸員）

9/27(土)14:00 -15:30 当館講堂

「北海道博物館紀行」は道内各地で特色のある活動をしている博物館・資料館などを取り上げ、その魅力を紹介していく企画です。第１回目の今回は、生田原町の「木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド」（以下、ちゃちゃワールド）です。学芸員の久野幸江氏にお越しいただき、ちゃちゃワールドの紹介と簡単な郷土玩具の製作指導をしていただきました。

ちゃちゃワールドは、世界約40ヶ国・１万点の木のおもちゃを収蔵・展示する博物館です。展示室「世界の木のおもちゃ館」には、飛行機や自動車の模型、動物のミニチュア、あやつり人形やくるみ割り人形、そして日本各地の郷土玩具など、さまざまな種類のおもちゃが展示されており、実際に手で触れて遊ぶことができる体験コーナーも設けられています。

まず、持参していただいた20点ほどのちゃちゃワールドの収蔵資料について、それぞれの遊び方などを解説していただきました。互いをぶつけて遊ぶ世界各地の「けんかごま」、さまざまな「からくりごま」や「剣玉」、大きな人形のなかに小さな人形がいくつも入れ子状に入っているロシアの「マトリョーシカ人形」、おなかの部分にお香を置いて火をつけると口から煙を吐き出すドイツの「煙り出し人形」などが紹介されました。

次に、新潟県水原町に伝わる郷土玩具「ぺたくた」の製作を体験しました。「ぺたくた」は絵がパタパタと消えたり現れたりする不思議なおもちゃです。

材料は、板（5cm×5cm、厚さ6mm）5枚と細長く切った和紙（赤色のもの：幅14mm、長さ8cm～10枚、青色のもの：幅20mm、長さ8cm～5枚）です。最初に、板を紙やすりで磨きます。次に、赤い和紙を両端に、青い和紙を中央にして、3枚の和紙を板の上に並べます。そしてその上に板を重ね、のりで和紙の端を板に貼りますが、赤い和紙2枚の左端は上に、右端は下に、中央の青い和紙の左端は下に、右端は上の板に貼りつけます。あとは同じように板を重ね、和紙を貼っていけばできあがりです。のりが乾いてから重ねた板の端を持ち上げると、板がパタパタと順番にひっくり返っていきます。

当日は、親子連れなど33名の参加者がありました。玩具作りでは、和紙を貼り付ける位置を間違ったりするなど苦労していましたが、それぞれ出来ばえには満足している様子でした。

※木のおもちゃワールド館　ちゃちゃワールド
〒099-0701 北海道紋別郡生田原町字生田原143-4 Tel.01584-9-4022/Fax.01584-9-4030,
E-mail:chacha@snow.hokkai.or.jp,
http://city.hokkai.or.jp/~chacha/
休館日／10月:無休,11･12月:月曜日
(11/3,11/24は開館), 12/30(火), 12/31(水)
開館時間／10月:9:30-18:00,
11/1-3/31:10:00-17:00
入館料／大人800(600)円小学生400(300)円
幼児無料＊かっこ内は15名以上の団体

（学芸課　中田　篤）

北の食フェスタ

食をテーマにさまざまな事業を行います。

■パネル展　北方諸民族の食文化　10／25（土）-11／9（日）

写真パネル、映像などにより北方諸民族の文化を紹介します。

■講　演　会　北方圏の食と地域の食　11／2（日）13:30-

■北の食体験　作る・食べる　11／2（日）11:30-15:00

北の民族料理の調理体験と試食（25名）、北方の食材を使った料理の試食会を行います。（250名）

◆寄贈資料　2003.7-9

○札幌市の納谷大宝氏から北太平洋地図ほか２点の資料及び以下の書籍を寄贈されました。
坂本木八郎2003『遥かなる中千島　松輪の海　-軍事郵便所物語-』
坂本木八郎
（社）綜合北方文化研究会1944
『千島学術調査研究隊』（社）綜合北方文化研究会
○大分県の杉目昇氏から以下の書籍を寄贈されました。
呼倫貝爾会1983　『ホロンバイルの回想』呼倫貝爾会
郡司彦1974　『満州におけるオロチョン族の研究』郡司彦

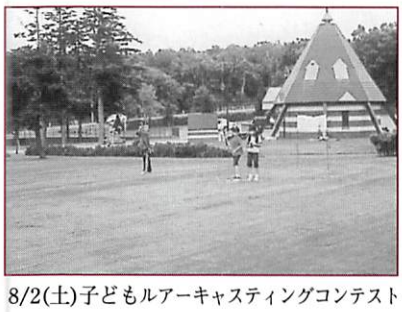
◆寄贈図書　2003.7-9

○杉目昇2003『関東軍のオロチョン工作と興安嶺を越えて退避した日本人の記録』
○山本多助を語り継ぐ会2003『阿寒国立公園とアイヌの伝説』山本多助を語り継ぐ会
○岸上伸啓(監修)2003『北へ！！NUNAVUT HANDBOOK エコツアーシリーズno.1』清水弘文堂書房
○勉誠出版2003『文化遺産情報のData ModelとCRMアート・ドキュメンテーション叢書1』勉誠出版
○戸部千春2003　『大地と物への刻紋を見つめて』戸部千春
○飯田卓2003『東・南シナ海の沿岸域における水産資源利用とそれをめぐる民族ネットワークの研究』平成13、14年度科学研究費補助金基礎研究B(1)研究成果報告書研究代表者田村正孝

◆行事報告　2003.7-9

北海道博物館紀行①
9/27(土) 木のおもちゃワールド館ちゃちゃワールド

講　座　8/30(土)発掘調査現地説明会
博物館クラブ



8/2(土)子どもルアーキャスティングコンテスト

8/16(土) 太鼓をつくってみよう

8/24(土) 発掘体験

◆行事案内　2003.10-12

ロビー展
10/4(土)-10/19(日)　発掘速報展
12/6(土)-12/18(木)　ウイルタ刺繍展
シンポジウム／コンサート
シンポジウム
10/18(土)・19(日)　第18回北方民族文化シンポジウム
テーマ「北太平洋沿岸の文化
ー文化接触と先住民社会」
会　場　オホーツク・文化交流センター
(網走市北2条西3丁目)
コンサート
10/23(木)　国際音楽の日記念フェスティバル 2003 in 北海道
「北方の歌の系譜を求めてー追分の旅・追分の母なる唄」
12/20(土)　ロビーコンサート
札幌交響楽団員による室内アンサンブル
※コンサートのみ有料となります。詳細は電話にてお問い合わせください。

◆みんぞく　こうこ　はくぶつかん in 北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

7/2(水)　市民団体「アイヌ・アート・プロジェクト」はアイヌの家庭料理や伝統工芸を紹介するカフェを2ヶ月の期間限定で開店、札幌市/D
7/8(火)　北海道開拓記念館は鯨類の骨を立てて信仰の対象とした「鯨類製記念物」を道内20箇所で確認したと報告/D
7/9(水)　石狩市教育委員会は、「石狩紅葉山49号遺跡」の発掘調査の概要報告をCD-ROMで作成/Y
7/15(火)　北海道内の野鳥研究家が協力してアイヌによる呼称や保護する上でのエピソードを盛り込んだ『北海道野鳥図鑑』(亜璃西社)を発行/Y
8/1(金)　南茅部町大船遺跡をはじめ、町内出土の主な遺物を公開する「大船遺跡速報展示室」が防犯・防災設備を整えて再オープン/M
8/7(木)　ロシアの文化やバイカル湖周辺の生き物を紹介する「大ロシア展」が千歳サケのふるさと館で開催/Y
8/8(金)　アイヌと世界の先住民の若者が交流するワールド・ユース・キャンプの分科会が道立十勝エコロジーセンターで開かれ、先住民の文化伝承などを巡って意見交換/AS
8/10(日)　7/1より2ヶ月の日程で発掘調査されている網走市モヨロ貝塚より、7世紀頃とみられるオホーツク文化期の土製の鐸など数多くの遺物が出土/A
8/19(火)　札幌市豊平川の、1100万年から530万年前の地層から見つかった化石が、カイギュウ類のジュゴン科ヒドロダマリス属のものであることが、札幌市博物館活動センターなどの調査で明らかに/AS
9/4(木)　南茅部町の垣ノ島A遺跡で縄文時代後期初頭(約4000年前)と見られる巨大な馬蹄形盛り土遺構を持つ集落が見つかる/AS

※A:網走新聞　AS:朝日新聞　D:北海道新聞　M:毎日新聞　Y:読売新聞

北方民族博物館だより
ー51号ー
2003年10月1日
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　網走市字潮見309-1
（天都山・道立オホーツク公園内）
TEL　0152-45-3888　FAX　0152-45-3889
e-mail : hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ http : // www. ohotuku26. or. jp / hoppohm/